

實際、砂利浜で語り合った後、二人は夜の帳が降りた海岸を寄り添って歩き、時々、立ち止まっては、一つ、二つ、瞬き始めた星を数えた。

あの夜はなぜか月が美しく、ふと南の島で目にしたウミガメの産卵を思い出し、その様子をリズに話した。「満月がね、母親みたいに見守る中、ウミガメの赤ちゃんが次々に卵から孵って、海を目指して歩み始めるんだ。誰に何も教えられなくても、自分の故郷が海だということを知っているんだね」

「迷子になったりしないの？」

「そういう子もいるよ。人間の足ならほんの数十秒の距離でも、ウミガメの赤ちゃんにとっては果てしない道程だ。砂にまみれ、凹みに足をとられ、中にはそのまま力尽きて死んでしまう子もいる。だけど、みんな生きるために海を目指して歩み続ける。月も、人間も、ウミガメの母親さえも、どんなに助けたいと思っても、その子が自力で海に辿り着くのをじっと見守るしかない。親の愛って、いつも側に居て世話を焼くのが全てじゃないんだな。多分、手出しもできずに見守る方がずっと切なく、難しい。それでも、そうやって見守ってくれる人が居るから、子供も生きていける。俺の父

親も今は夜空に浮かぶ月と同じだ。俺はただ必死に生きて行くだけ。本当にそれだけだ」

するとリズの瞳がみるみる潤み、

「なんていじらしいの！ 私もそういう場面を見てみたい。一匹、一匹、胸に抱いて、温めてあげたい……」

両手を胸の前で折るように合わせた。そのあまりの可憐さに、思わず上体が傾きかけた時、後ろからマードック夫妻に声をかけられた。どうやら彼らの数十メートル後ろを付けていたらしい。

「カリーナが『お似合いのカップルだ』と喜んでいた。女性はこのいうシチュエーションが大好きなんだ。自分も青春時代に戻ったみたいで、ドキドキするらしい」

「俺は君の奥さんを喜ばせるためにここに来たんじゃないよ」

「まあ、いいじゃないか。お前も一生に一度くらい、本気で人を好きになってみろよ。人生が変わるぞ」

だが彼は右から左に聞き流し、「格納庫に行ってくる」とその場を離れた。